

Rookies!

対話教育を学びにきた大阪で、震災に関する哲学カフェを企画・進行

辻 明典さん (大阪大学大学院文学研究科博士前期課程)

哲学カフェ「原発について何を知るべきか?」の進行を務めた辻明典さんは、大阪大学の大学院生。もともと教育学を専攻していましたが、「対話を用いた教育」への関心から、2011年春、対話実践が盛んな臨床哲学研究室へ進学。ところが、その直前、福島県南相馬市にある実家が東日本大震災で被災します。哲学カフェの企画の裏には、どんな思いがあったのでしょうか?

異質な他者と出会える空間

初めて哲学カフェに参加したのは、2010年の8月。東京の神保町の喫茶店でカフェフィロが開催している哲学カフェでした。「対話を通して考えること」を軸とした卒論のヒントが欲しいと思っていたとき、ゼミの先生が紹介してくださいました。

参加してみて、みなさん、よくしゃべるので驚きました。話したい内容もその場で参加者たちが話し合いながら決めていくのが興味深く、なにより、楽しかった!



にお説いていただきました。私自身も、原子力災害の被災者ですし、現実と距離を置きながら考えるきっかけが欲しかった。参加者のなかには、結論を導こうとはしないスタイルにいらだちを覚えた方もいらっしゃいました。私自身も原子力災害の当事者なので、原発に対して明確な「答え」が欲しいという思いには共感できます。しかし、原発の問題について哲学カフェが有効なのは、知識や情報ではなく、問い合わせのものを考え方を直す機会を得られることではないでしょうか。

高校生との対話

研究室の仲間と京都の高校で対話授業を担当しているほか、最近は他の研究科の学生と、高校生とともに被災者支援を考える活動も行っています。これからも、哲学カフェや学校など、対話の場に積極的に足を運びたいと思っています。そのなかで、哲学的に話し、考えることについてもっと考えていきたいです。

原発に関する哲学カフェ

広くいろんな人と震災について考える機会が欲しいと思っているときに、臨床哲学研究室で知り合ったカフェフィロの方

賛助会員募集中!

カフェフィロでは、活動に賛同し応援してくださる賛助会員を募集しています。会員の方には、『哲学喫茶』最新号と『哲学喫茶瓦版』を送付させていただきます。

年会費 1口 3,000円

振込先

銀行名:三菱東京UFJ銀行 東神戸支店
支店番号:492
口座番号:0104410

口座名義:カフェフィロ クワバラ ヒデユキ
※住所氏名をお書き添えのうえ、お申し込み下さい。

※振込手数料が発生する場合は、ご加入者負担となります。

お問い合わせ先

info@cafephilo.ne.jp (カフェフィロ事務局)

CAFÉ PHILO (カフェフィロ)

2005年、大阪大学・臨床哲学研究室のメンバーを中心に発足。哲学カフェ、哲学対話セミナー(こども/大人対象)など、哲学の対話を促進する活動を開催。「社会のなかで生きる哲学」のあり方を探り、それを実現するとともに、哲学とともに生きる人たちをサポートする組織です。

〒537-0023
大阪市東成区玉津3丁目8-6 ロイヤル丸文II406号室 たまてばこ内
e-mail: info@cafephilo.jp

<http://www.cafephilo.jp>

哲学喫茶瓦版 2011年9月号
2011年9月30日発行
発行人:高橋綾
編集・デザイン:松川絵里

哲学喫茶瓦版

NEWSLETTER FOR PEOPLE LIVING WITH PHILOSOPHY FROM CAFÉ PHILO

2011

9

特集: 東日本大震災と哲学カフェ

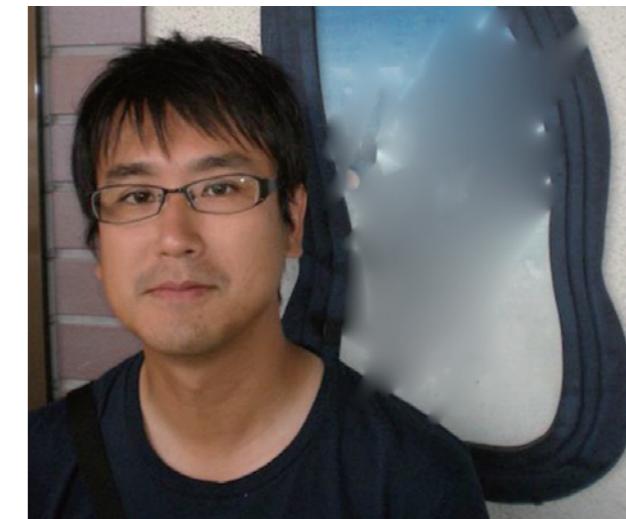
- review 01 てつがくカフェ@ふくしま「いま、〈ふくしま〉で哲学するとは?」
- review 02 哲学カフェ「原発について何を知るべきか?」@アートエリアB1
- Rookies! 辻明典さん~大阪で原発に関する哲学カフェを企画・進行~

interview

てつがくカフェ@ふくしま~震災後の福島で哲学カフェを開催~



小野原 雅夫
(県立福島商業高校教諭)
渡部 純
(福島大学教授)



「この〈出来事〉から哲学ができるのであれば、哲学が存在する意味はどこにあるのだろうか?」

渡部: もともと学生時代から現実の社会問題に关心を寄せていました私は、むしろ哲学に対しては“浮世離れした学問”と敬遠さえしていました。そんな私の哲学に対するイメージを180度転換したのは、「出来事から出発し、出来事をめぐって哲学することをわたしは夢見ている」(高橋哲哉著『記憶のエチカ』)という言葉です。目を背けたくなるような〈出来事〉や〈現実〉から哲学を切り離さない姿勢に共鳴するとともに、そこで意味する哲学の在りよう興味を惹かれました。その意味で言うと、未曾有の震災・原発事故という今回の〈出来事〉の意味を考え続けることは、私を哲学に向かわせた原点と切り離せない問題です。

小野原: あれだけ大きな〈出来事〉が発生すると人は誰しも哲学をしてしまうのだと思います。私としては、哲学の真骨頂はもっとごく身近な日常的な事柄を深く問い合わせることにあると思っています。〈出来事〉が大きくなってしまうと、発生直後では〈出来事〉の全体像をつかむことができませんし、また、こういう問題の場合、政治やらイデオロギーや有利害関係やらが介入してしまって、純粋に哲学的な議論ができなくなってしまう可能性も高くなります。実際に哲学カフェをやってみて、まだこのテーマで哲学的な議論をするには時期尚早だったかなという気もしました。しかし、哲学的対話となるかどうかは別

として、このテーマについてみんなで語り合うことは必要だったのだなと感じました。

渡部: この〈出来事〉に対して、いまだ私は意味や言葉を見つけられないもどかしさの渦中にあります。けれど、そうだからこそ、対話によって思考と言葉を紡ぎだすことを目指す哲学カフェの活動が求められているのだと感じさせられました。まだ活動は始まったばかりです。方法論も含めて、私たちにとってそこで求める哲学=てつがく(?)とは何か、まだまだ定かではありません。市井の方々の経験や言葉との対話から、その〈かたち〉を見つけていきたいと思っています。

